

## 形相の庇護者

### — ユリウス・カエサル・スカリゲルと知性の問題

坂本 邦暢

#### — はじめに

哲学の歴史上、ルネサンスは古代の諸学派の復興の時代として知られる。プラトン主義、懐疑派、ストア派に関する史料の翻訳や、学説の再構成が進められた。だが復興によって中世以来支配的であったアリストテレス主義が衰退したわけではなかった。むしろ最盛期をむかえたといつてよいだろう。一五〇〇年から一五〇年の間に生みだされたアリストテレス注解の数は、六世紀のボエティウスから一〇〇〇年の間の数を上回るといわれる。また古代のギリシア人註釈家の作品が校訂・翻訳され、解釈にさらなる多様性をもたらしていた。<sup>1)</sup>

隆盛をきわめるアリストテレス主義のなかで、ひときわおおきな存在感をもった著作があった。ユリウス・カエサル・スカリゲル (Julius Caesar Scaliger, 1484-1557) の『顯教的演習』 *Exotericæ exercitationes* (パリ、一五五七年) だ。形而上学と自然哲学の教科書としてアルプス以北の大学で広く用いられ、読んでいなければ哲学者とはいえないといわれるほどの知名度を誇った。この書物がもったインパクトを理解せず、ルネサンスから初期近代にかけてのアリ

ストテレス主義の歴史を語ることはできない。

にもかかわらず『演習』は今日ほぼ忘れさられている。難解なラテン語や大部さと並んで研究者を遠ざけている理由として、なんのために著された書物なのか容易にはわからない点があげられるだろう。たしかに一義的な目的ははっきりしている。ジローラモ・カルダーノ (Girolamo Cardano, 1501-1576/77) の『精妙やじこいつ』 *De subtilitate* (ニユルンベルク、一五五〇年) の批判だ。だがそもそもなぜ批判が必要だとスカリゲルは考えたのか。カルダーノの哲学のどこに問題を見いだしたのか。この問いに答えるのは簡単ではない。明確な答えをスカリゲルは与えていないし、『演習』の統一性を欠いた構成は構想についての手がかりを提供してくれない。それどころか、『精妙さについて』を読みながら感じた不満を並べた読書ノートの寄せ集めという印象すら与える。そこにあるのはためにする批判でしかなく、哲学的な一貫性を探しもとめても無駄なように思えてくる。

この理解は伝統的なものだ。というよりも古い。カルダーノがそのように考えていた。彼によれば、スカリゲルは「人気を得るため」に論争をしかけてきたのだという<sup>(2)</sup>。おなじ理解は後世の人びとにも引きつがれた。とりわけスカリゲルの名声が凋落した一七世紀後半以降に顕著である。近年の研究はもはや『演習』を単なる誹謗中傷の書としては理解していないものの、一貫性を見いだしあぐねているのは変わらない。

この伝統的な評価はいまや修正されなくてはならないというのが、私が近著でしめした認識だった。『演習』はすくなくとも一定の一貫性をもっている。スカリゲルの哲学にはいくつかの核をなす見解があり、それらが数多くの議論の前提をなしているのだ。その核とはなんなのか<sup>(3)</sup>。

本稿ではこの問いに、『演習』のなかでもっとも長い章(演習)の分析を通じて答えていく。演習の三〇七番でスカリゲルは人間の知性 (*intellectus*) に関するカルダーノの見解を批判した。この箇所については二〇〇八年にイアン・

マクリーンが論文を発表し、基本的な論点を整理している。<sup>(4)</sup>だがカルダーノの学説の解説に手厚い一方で、スカリゲルにおおきな紙幅を割いていない。その制約のためか、スカリゲルがカルダーノを他の哲学者との関係でどう見ているかが解明されていない。これから見ていくように、この点に注目してはじめて『演習』の執筆意図が浮かびあがってくるのである。その着眼点は同時に、論敵のカルダーノについても、またより広く知性の問題に私たちがいかに接近すべきかに関して新たな見通しをしめすことになるだろう。

## 二 付帯性としての知性—アレクサンドロスとアヴェロエス

ルネサンス期の知性をめぐる議論はほぼすべて、アリストテレスの『靈魂論』をどう解釈するかにかかっていた。カルダーノとスカリゲルの論争で問題となったのは、第三巻第四章にある以下の箇所だ。

：知性は、可能態においてはある意味で知性認識されうるものであるが、しかし現実態においては知性認識する以前には何ものでもない。〔中略〕なぜなら、質料を伴わないもの場合には、知性認識しているものと知性認識されているものとは同一だからである。<sup>(5)</sup>

この文章をカルダーノは誤って理解したとスカリゲルは述べ、『精妙さについて』から次の文言を引く。

知性とは知性認識されたものそのものだ。たとえば私が馬を知性認識するとき、私の知性は馬の形相になる。<sup>(6)</sup>

スカリゲルは嘲笑する。「カルダーノの知性は馬の形相である。よってカルダーノは馬だ」。問題はこれにとどまらない。

ここであなたははっきりと知性は実体ではまったくなく、付帯性の一種だと論じている。「中略」なぜなら知性認識する前、あなたはいかなる知性ももっておらず、知性認識すると外から知性が到来することになるのだから。そしてかつてあなたが存在していたにもかかわらず存在していなかったものが、いまやあなたのうちにあらわれることになるのだ。<sup>(8)</sup>

知性が対象の形相だとすると、認識以前にはなかったことになる。すると人間にとって知性はあるときにはあり、別のときにはあらぬものとなり、「白さ」や「教養あること」のような付帯性の一種となってしまうだろう。だが「理性的な動物」という人間の定義からして、知性は本質的なものであり付帯性ではありえない。

カルダーノの学説の問題点を指摘するだけでは不十分だとスカリゲルは考えていた。背後には古代よりつづく伝統がひかえていると認識していたからだ。彼はいう。

「アフロディシアスの」アレクサンドロスは『形而上学』第二二巻に関して次のように述べる。「質料的形相は可能態として知性認識可能なものだ。それが知性認識可能となるのは、それを質料から抽象する知性の働きによる。それゆえ質料的形相が知性認識されるとき、たんに現実態において知性認識可能なものとなるだけでなく、知性そのものになる。これはちょうど現実態において感覚可能なものが、感覚されると感覚そのものになるのとおな

じだ。なぜなら事物の形相を受けとっている知性は、現実態において知性となるから」。これらの言葉はたわごとであり、あなたのためごとの生みの親なのである。<sup>(9)</sup>

アフロディシアスのアレクサンドロスは、古代のアリストテレス註釈家である。その『形而上学注解』のギリシア語原典は一九世紀まで刊行されることはなかったものの、ラテン語訳は一五二七年にローマで出版されており、続いてバリとヴェネツィアでそれぞれ三六年と四四年に再版されていた。<sup>(10)</sup>ラテン語訳をスカリゲルが直接に参照したのか、問題の文言を間接的なたちで知ったのかはわからない。ここで注意しておかねばならないのは、『注解』の一二巻がアレクサンドロス本人によって著されていないということだ（ただし引用されている箇所は彼の考えを正確に伝えている）。真作性を疑うことなく、スカリゲルはアレクサンドロスをカルダーノの学説の源泉とみなした。そこにこそ、知性を認識の対象と同一視する伝統の出発点があるというのだ。

スカリゲルはさらに学説史を進める。アレクサンドロスの理論はカルダーノに追隨されただけでなく、より危険な学説を生み出したという。アヴェロエスの知性単一論だ。スカリゲルによると、アヴェロエスの推論の出発点は次のようなものだった。

アヴェロエスは多くの箇所で見ている。「知性とは知性認識された事物のことだ。それゆえ個物が認識されたなら、知性は個物になるだろう」。<sup>(11)</sup>

アレクサンドロスならって知性と対象を同一視すると、個物を認識したとき知性は個別的なものとなってしまふ。だ

がそうすると普遍を認識できないという難点が生じる。より詳しい説明をアヴェロエスは『靈魂論大注解』で与えている。

ここから、質料的知性の本性が特定事物、すなわち身体でも身体能力でもないことはあきらかである。というのも、仮にそれがそういう特定事物としたら、個別的な特定形相を受容することになり、そうなる今度は、形相は知性のうちに受容されていても「普遍的形相としては」可能的に認識されているにすぎないことになるため、質料的知性はたかだか個別的な形相——心的であれ物体的であれ——の性状を判別にするにとどまり、形相としての形相の本性を判別しないことになってしまうからである。<sup>(12)</sup>

個別的なものは個物しか認識できず、普遍をとらえられない。それは普遍的なものだけに可能だ。だが経験からあきらかなように、人間は個物と普遍の両方を認識している。これは個別的なもの<sup>(13)</sup>と普遍的なもの<sup>(14)</sup>のふたつが関与していなければ達成できない。

以上からアヴェロエスが引きだした結論をスカリゲルは要約する。

それゆえもし質料的知性に普遍が生じるのならば、普遍を生みだす別の力が考えだされ、質料的知性のうちに置かれなくてはならない。<sup>(15)</sup>

このためアヴェロエスは知性が個物を知性認識するということすら認められなかった。なぜなら知性が個物と

なってしまう、分有不能になってしまふからだ。だが仮定と定義からして、知性とは分有可能なものであった。ここから次のような狂気にいたった。すなわち彼ら「アヴェロエスら普遍的な知性を想定する者たち」は、私たちのうちに別の種類の靈魂をつくり、これが個物を知性認識すると考えたのだ。彼らはそれを「思考靈魂」*anima cogitativa*と呼ぶ<sup>(14)</sup>。

最初の引用の「力」とは、すべての人間に共通の知性を指す。これは普遍的認識の対象であり、それらを分有して人間は普遍を認識する。他方で二番目の引用にある「思考靈魂」とは、個別の身体に宿る個々人の靈魂を指す。質料的知性とも呼ばれるこの靈魂は個物を認識できる。普遍と個別からなるふたつの知性の働きによって人間の認識は可能になっているというわけだ。

このアヴェロエスの学説をカルダーノは引きついだのだとスカリゲルは論じる。典拠は論敵が一五四五年に出版した『靈魂の不死について』*De immortalitate animorum* (リヨン)にあった。

『靈魂論』[『靈魂の不死について』]のなかで、あなたはアヴェロエス、および彼以前のテミステイオスの狂気にならない、靈魂を可死的なものにした。他方で知性は一つであり、第一のものであり、すべてを満たして、あらゆる個物に入りこんでいる。これら事物のそれぞれは可能な範囲で知性を受けいれて、生命を守るために保持している。まるで一種の非物体的な太陽があり、それがなにもにたいしても昇りも沈みもせず、つねに、いたるところですべての事物にたいして存在しているかのよう<sup>(15)</sup>に。

アヴェロエスとおなじように、カルダーノは単一の知性に個物が与っていると考えた。ここから普通の認識が説明される。他方で個物の認識は個別的な靈魂によってなされる。だがそうするとこの靈魂が可死的なものになってしまふという。

この帰結の究極的な源泉として、再度スカリゲルはアレクサンドロスに言及する。

それゆえあなたがアレクサンドロスの著作から靈魂についての議論の寄せ集め「『靈魂の不死について』」に取りこんだものは哲学から完全に逸脱している。すなわち質料的知性は靈魂にある一種の準備状態だというのだ。その準備状態はあらゆる知性認識可能な形象を受け入れるのにふさわしい状態にある。もし準備状態であるならば、知性は付帯性となるだろう。<sup>(15)</sup>

個々の靈魂（質料的知性）はそれぞれの身体が有するある種の状態である。物質の状態であるため付帯性でしかないし、身体がなくなれば消滅してしまふ。すでに触れたように、スカリゲルの解釈によれば付帯性であるという点では、普遍的な知性も変わらない。それは認識にともなってはじめて人間に宿るからだ。ここから彼がカルダーノの知性を徹頭徹尾付帯性に支配されたものと理解していたのがわかる。普遍的であれ個別的であれ知性は付帯的とすることで、カルダーノは実体を追放してしまつたのだ。

### 三 イデア論と世界靈魂—プラトン

スカリゲルによれば、アレクサンドロスとアヴェロエスがカルダーノの知性論の源泉であつた。だがさらに別の哲

学者とのつながりも彼は見てとっていた。アヴェロエスへの依拠によって、根本的にアリストテレスとは相容れない哲学者にカルダーノは接近したというのだ。

普遍的な人間の知性は、プラトンのイデアとなんの違いもない。イデアのそれぞれはひとつのなにかであり、すべての個物に分有可能だ。この「普遍的な知性の」学説の最初の発明者は、「証拠が」残っている限りでは、テミステイオスであった（だがアレクサンドロスもおなじことを主張していたように思われる）が、アヴェロエスがそれを成長させた。<sup>(17)</sup>

それ自体として単一のものが数多くの事物によって分有されるといふ点で、普遍的な知性はプラトンのイデアと変わりがない。知性に関するそのような理解がアヴェロエスらによってアリストテレスから引きだされている。スカリゲルは激しく反発する。

テミステイオス、および彼以前のプロティノスはこの知性を人間のなかにしか認めなかった。他方でああなたは、私の思うところアナクサゴラスの夢想から出発して、この知性を別の事物にも分配してみた。そのため知性はそれ自体としては犬、セミ、そして石すら助けているのだ。ただし質料の愚鈍さにより無駄に終わっているのだが。知性はそれ自体としてはすべてを照らします。だがすべての事物が必ずしも照らされるわけではないというわけだ。「中略」そしてあなたは頑迷にもこれらの馬鹿げたことがアリストテレスの見解からくるかのように論じるのだろうか。もしそうであれば、どうやってアリストテレスはプラトンのイデア論に反論できただろうか。

彼の異議は、アイデアが個別的なものであると同時に離存的なものであるという主張に向けられていたのだ（なぜならおなじものが個別的なものの外側にありながら内側にある、あるいは分離可能でありながら結合しているということとは不可能だから）。「もしアリストテレスがあなたの見解を共有していたならば」彼はおなじ問題におちいったことだろう。知性が一つでありながら、分有可能であり、かつ分離可能であるという問題にだ。<sup>18</sup>

アナクサゴラスは「大小、貴賤を問わずすべての動物に知性が属している」と考えていた。<sup>19</sup>この見解を発展させてカルダーノは知性が万物に宿っていると考えたという。ただし質料の完成度が十分でない動物や石は知性を発現させない。前節で確認したように、スカリゲルはこのような知性を沈みも昇りもしない太陽にたとえており、実際カルダーノは光の比喩を使って知性の働きを解説していた。このような学説をアリストテレスの名のもとに唱えるのは許されないとスカリゲルはいう。個々の事物から離存していながら同時に分有されているのは端的に矛盾だとアリストテレスはアイデア論を攻撃してははずだ。

普遍的な知性を能動知性と言いかえながらスカリゲルは論を進める。彼が問題視するのは、能動・受動知性のような区分を持ちだす論者たちは、いまだかつて能動知性の正体について見解の一致にいたったことがないという点だ。この不一致はそもそもその想定の不合理性を物語っているという。彼はいう。

ある人々は能動知性は分散し、ほとんど散乱している知性だと論じた。他の人びとによると世界靈魂であり、従者としての義務を果たしているかのような存在だという。アヴェロエスは『形而上学パラフレーズ』のなかで、能動知性とは天の動者のなかの最後の者「月の天球の知性」だと論じている。ある人びと「たとえばアレクサン

ドロス」はじつに向こう見ずにも能動知性を神そのものにしようと欲した。<sup>(20)</sup>

注目すべきは二つ目の文だ。スカリゲルによれば、普遍的な能動知性を世界霊魂と同一視している哲学者たちがいるという。ここで『演習』にカルダーノの世界霊魂論への批判が収録されていたことを思いおこさねばならない。『霊魂の不死について』や『精妙さについて』のなかでカルダーノは、全宇宙に浸透するある種の力を想定し、それをプラトンにならって世界霊魂と呼んでいた。スカリゲルを苛立たせたのは、カルダーノがこの力を時として熱と同一視した点である。スカリゲルの考えでは、これは霊魂の物質への還元にも他ならない。するとその不死も否定される。<sup>(21)</sup>

このように見えてくると、スカリゲルがカルダーノの知性論のどこをもっとも危険視したかがわかるだろう。知性や世界霊魂といった非物質的な存在を指すかにもえる単語を用いながら、実際に意味しているのは熱だというのだ。カルダーノの知性論は忌むべき物質主義の偽装にすぎないというわけだ。

#### 四 神的な霊魂

スカリゲルによれば、カルダーノの学説は二つの重要な側面をもつ。一つは普遍的な知性であり、もう一つは可滅的な霊魂の想定だ。後者の考えをスカリゲルは攻撃する。

あらゆる完全な混合物の形相は、それが（ダイヤモンドにおいてそうであるように）たとえ霊魂でないにせよ、四元素とはまったく異なる第五精髓である。ここから霊魂を四元素からなるとみなすアレクサンドロスの議論への決定的な反論が引きだされる。霊魂の力は元素の力がかつてけつして生じさせたことがないことを生じさせる

のだ。<sup>(22)</sup>

混合物はなんであれ、四元素が引き起こさない活動をもたらす。それを引きおこす形相をアレクサンドロスのように単なる四元素の混合とみなすことはできない。むしろまったく別の第五精髓からなるとせねばならない。このような形相は神的なものですらあるとスカリゲルは論じている。<sup>(23)</sup>

普遍的な能動知性の想定については、それはなによりも不要だとスカリゲルは論じる。理解の局面を考えると、まずたとえばカエサル形象を受け入れ、表象を手に入れるだろう。これは受動的な理解だ。だがさらにカエサルは今ここにいると判断すると、そのとき知性はなにかを能動的に行っている。表象を時間と場所に照らしあわせて考察しているからだ。それによりカエサルが今ここにおり、未来には別の場所にいるだろうという認識が生まれる。ここから「今」とか「かつて」とか「ここ」とかいう状況がカエサルから分離可能な状況だとわかる。これらを取りのぞくと人間の純粹な本性が残る。知性はおなじ本性をカトーのうちにも認めうる。したがってそれが人間に共通の本性であると理解する。このようにして知性は推論によって付帯性を除去し、普遍を理解できる。ならば表象を受けとる知性とは別の能動知性を想定する必要はない。

むしろ想定するとかえって不合理が生じるとスカリゲルはいう。このとき能動知性はまず表象を理解し、それが個別的なものだと認識するはずだ。そこから個別性を取りのぞき、普遍を獲得するだろう。だがそもそも能動知性は個別的なものを認識できなかったはずだ。そのようなものが役割を果たすためにまず個物を認識せねばならないとは矛盾もはなはだしい。<sup>(24)</sup>

以上からスカリゲルの立場が浮かびあがる。普遍的な知性を想定する必要はない。個々の人間は不死なる靈魂を通

じて普遍と個物の両方を認識する。スカリゲルはいう。

靈魂はその尊嚴からして、役目を果たし、力を發揮するのに、いかなる付帯性、ないしは自身のうちに内在するなにかの保護や助けを必要としないというのがふさわしい。靈魂はいかなる媒介もなしに直接的に本質を通じて役目を果たし、力を發揮するのだ。その本質は力のいかなる實在的分離も含んでおらず、自律した原理としてある。すなわち作用を生みだすにあたって自分自身で十分である。それらの作用はたんに単純で一様なものだけでなく、複合的であったり、互いに異なっていたり、さらには互いに対立していたりする。それらの作用を靈魂は自らの単純性と神性がゆえに生みだすのだ。とはいえそれらの作用は、あるものの次にあるものというように順番に引きだされるのだが<sup>(25)</sup>。

靈魂は神的で単純であるがゆえに、完全に自律的にさまざまな作用を生みだす。これがスカリゲルの靈魂観の核心だった。この想定を揺るがすような普遍的な知性の存在は否定される。

しかし否定の帰結は重大だった。スカリゲルはアリストテレスから離反したのだ。アリストテレスが能動知性を想定していたのは『靈魂論』からあきらかであり、スカリゲルも認めるところだった。師に忠実であることを誇るスカリゲルにしてみればこの結末はよろこばしいものではなかったはずだ。実際、後のアリストテレス主義者からは批判を招く<sup>(26)</sup>。だがスカリゲルにしてみれば離反はやむをえないものであった。知性の機能を分割してしまえば、プラトンのイデア論、アヴェエロエスの知性単一論、そしてアレクサンドロスの物質論を呼びこんでしまいかねないからである。その危険性をまさに再現していたのがカルダーノの哲学なのだった。

## 五 結論

ここまでの分析から、スカリゲルのカルダーノ批判が決して場当たり的なものでも、たんなる誹謗中傷でもなかったと理解されたらう。それはむしろ一貫した学説史的な展望に立脚していた。スカリゲルはカルダーノの知性の理論のうちに、少なくとも三つの哲学上の立場が合流しているのを見てとっていた。アレクサンドロス、アヴェロエス、そしてプラトンによつて代表される潮流だ。知性を認識の対象と同一視するアレクサンドロスの理解が、アヴェロエスの知性単一論を生み出した。この学説のもとでは個別的な靈魂は可滅的なものとなり、アレクサンドロスの物質主義とおなじ帰結が導かれる。同時に普遍的な知性の想定はプラトンのイデア説と重なり、この普遍者を熱と同一視することから、またもやアレクサンドロスの可滅的靈魂觀があらわれる。結局のところ、カルダーノの哲学はどこから出発しても最終的には靈魂の不死性を否定する反宗教的な学説にたどり着いてしまうとスカリゲルは見なしていた。

この危険を回避するため、スカリゲルは靈魂のうちにかなる機能の分割も認めない立場を打ちだしていく。神的な靈魂は完全に自律的に作用を生み出す。いや靈魂だけでなく、およそ形相はみな第五精髓であり、神的だとスカリゲルは主張する。彼の哲学に一貫性を与えている核を求めらば、まずはこの形相觀をおさえねばならない。ロバート・ボイル (Robert Boyle, 1627-1691) がスカリゲルを「形相の最大の庇護者」the greatest Patrons of Formsの一人に数えたのはじつに適切な評価であった。<sup>27)</sup>

スカリゲルについての以上の認識は論敵についても多くを教えてくれるかもしれない。カルダーノは現代の研究でさまざまな装いのもとにあらわれる。プラトン主義者として描かれたり、アヴェロエス主義者と見なされたり、はた

またルネサンス自然主義者の一人に数えられたりするのだ。<sup>(28)</sup> これら諸側面の関係が十分に整理されないので、彼の哲学はしばしばとらえがたく、一貫性を欠いたものに映る。これら一見するとばらばらの要素を一つの体系に整理する視点をスカリゲルの批判は与えてくれる。もちろん批判者による多分にバイアスのかかった再構成をそのまま受けられるわけにはいかない。スカリゲルの解釈の妥当性は、カルダーノの残した著作に即して検証されねばならない。それでも錯綜したカルダーノの哲学を解きほぐす手がかりをスカリゲルが提供しているのは確かだろう。

最後に、スカリゲルのしめした展望は私たちの知性論へのアプローチに変更をうながしているように思われる。この問題に取りくむにあたって、従来の研究は知性単一論に焦点を絞る傾向があった。それぞれの論者がアヴェロエスに同意したか否かに着目するのだ。しかし知性単一論は決してそれ単独で存在していたわけではなかった。すくなくともスカリゲルの理解ではイデア論と物質主義と不可分であった。この連関はプラトンの全著作と、アレクサンドロスをはじめとする古代の註釈家たちの作品が訳されたルネサンス期だからこそ可能となったものだろう。ともすれば現代では見失われてしまった学説の連関のなかで当時のアリストテレス主義が動いていたことを、スカリゲルの『演習』は教えてくれるのである。<sup>(29)</sup>

\*本稿は、二〇一五年六月二六―二七日にラドバウド大学（オランダ）で開催された会議「Julius Caesar Scaliger and Sixteenth-Century Natural Philosophy」で執筆者が行った発表に基づく。

## 注

(1) 註解数の推定については、Charles H. Lohr, *Latin Aristotle Commentaries 2: Renaissance Authors* (Firenze: Olschki, 1998), viii を見よ。

ルネサンスのアリストテレス主義については、チャールズ・B・シュニッツ、ブライアン・P・コーペンハイヴァー『ルネサンス哲学』榎本武文訳（平凡社、二〇〇八年）、五九―一二六頁；Craig Martin, *Subverting Aristotle: Religion, History, and Philosophy in Early Modern Science* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2014) を見よ。

- (2) カルターノ『我が人生の書：ルネサンス人間の数奇な生涯』青木靖三、榎本恵美子訳（社会思想社、一九八九年）、二三八頁。カルターノについては、榎本恵美子『天才カルターノの肖像：ルネサンスの自叙伝、占星術、夢解釈』（勁草書房、二〇一三年）を見よ。
- (3) Kuni Sakamoto, *Julius Caesar Scaliger, Renaissance Reformer of Aristotelianism: A Study of His Exoteric Exercitationes* (Leiden: Brill, 2016). 解釈史については一一〇頁を見よ。スカリゲルの生涯の簡単な紹介として、坂本邦暢『アリストテレスを救え：一六世紀のスコラ学とスカリゲルの改革』ヒロ・ヒライ、小澤美編『知のミクロコスモス：中世・ルネサンスのインテレクトゥアル・ヒストリー』（中央公論新社、二〇一四年）、二五―二七九頁の二六〇―二六二頁を見よ。
- (4) Ian Maclean, "Cardano's Eclectic Psychology and Its Critique by Julius Caesar Scaliger," *Vivarium* 46 (2008): 392-417.
- (5) アリストテレス『靈魂論』第三卷第四章 429b30-430a4 中畑正志訳『アリストテレス全集七』（岩波書店、二〇一四年）、一五〇頁。訳語を一部旧来のものに改めた。知性に関するルネサンスの議論については、Eckhard Kessler, "The Intellectual Soul," in *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, ed. Charles B. Schmitt, Quentin Skinner, & Eckhard Kessler (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), 485-534 を見よ。
- (6) Scaliger, *Exotericae exercitationes* (Paris: Michel Vascosan, 1557), 307.6, 393r: "Intellectus, res est ipsa, quae intelligitur. Veluti cum equum intelligo: intellectus meus est forma equi." 『精妙なびんご』の該詞箇所は以下を参照。Cardano, *De subtilitate*, lib. 14 (*Opera omnia* [Lyon: Huguetan et Ravaud, 1663; repr. Stuttgart: Frommann, 1966], 3:583b = John M. Forrester, trans., *The De subtilitate of Girolamo Cardano* [Tempe: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2013], 742-43).
- (7) Scaliger, *Exercitationes*, 307.6, 393v: "Intellectus Cardani est equi forma. Ergo Cardanus equus est."
- (8) Scaliger, *Exercitationes*, 307.6, 393r: "Nam hic omnino substantiam nullam esse intellectum, palam proliferis: sed accidens quiddam. [...] Quia antequam intelligas, nullum habes intellectum: sed cum intelligis, accedit extrinsecus intellectus. Et fit in te, quod antea, licet te existente, non existebat."
- (9) Scaliger, *Exercitationes*, 307.7, 394v: "Alexander super duodecimo Metaphysices, ait: formas materiales esse potentia intelligibiles: fieri

vero intelligibiles ab intellectu illas a materia abstrahente. Fieri ergo formas illas, cum intelliguntur, non solum intelligibiles actu, sed etiam intellectum ipsum. Sic actu sensibile fieri sensum ipsum, cum sentitur. Intellectus enim recipiens rei formam fit, inquit, actu intellectus. Quae verba nugae sunt, tuarum parentes nugarum.” 邦語のラテン語記号の項の。ラテンカンパニー『洋書十部註釋』12.36 (Heyduck, 694.27-39 = Juan Ginés de Sepúlveda [Roma: Marcello Silber, 1527], sig. X iiiij): “Formarum igitur, quae materiales sunt, et in materia suam esse obtinent, hae ab intellectu intelligibiles fiunt, cum sint potentia, non per se et actu intelligibiles, quippe quas intellectus sequestrans a materia cum qua ipsis esse suppetit, intelligibiles efficiat. Et tunc ipsarum quaeque intelligibilibus actu est, atque mens sive intellectus efficitur, cum intelligitur, non ante. Nam intellectus actu nihil est aliud quam forma, quae intelligitur. Itaque harum quaeque, licet non sit simpliciter intelligibiles, tamen cum intelligitur, intellectus efficitur. Ut enim sensus actu idem est, quod actu sensibile, et actu sensibile idem quod sensus actu, sic intellectus actu, hoc est quod actu intelligibile, et actu intelligibile idem, quod intellectus actu. Intellectus enim sumens intellectae rei formam, ipsamque a materia secernens illam actu intelligibilem facit, et ipse actu intellectus efficitur.”

- (10) James Hankins & Ada Palmer, *The Recovery of Ancient Philosophy in the Renaissance: A Brief Guide* (Firenze: Olschki, 2008), 28.
- (11) Scaliger, *Exercitationes*, 307.16, 400r: “Avenrois multis in locis aiebat: intellectum esse res intellectas. Igitur singularem fore: si ab eo singularia percipiuntur.”
- (12) アヴェロエス『靈魂論註解』花井一典、中澤務訳『中世思想原典集成十一：イヌラーム哲学』（平凡社、二〇〇〇年）一〇三三—一〇三三頁。
- (13) Scaliger, *Exercitationes*, 307.18, 402r: “Iccirco universalia si ferent in intellectu materiali: vim aliam excogitatum oportuit, quae illa faceret, atque in hoc stateret.”
- (14) Scaliger, *Exercitationes*, 251, 324v: “Quare ne id quidem efficere potuit, ut intelligeret singularia. Evaderet enim singularis. Ergo incommunicabilis. At erat per hypothesis, ac definitionem, communicabilis. Eo igitur dementiae ventum est, ut aliam in nobis animam fabricarent, quae cognosceret singularia. Cogitativam appellant.”
- (15) Scaliger, *Exercitationes*, 307.14, 398v: “Tu in libris tuis De anima, sequutus Avenrois, atque eo prioris Themistii vaesaniam, fecisti animam mortalem. Intellectum vero, ens unum, primum, omnia implens, atque in unumquodque entium sese insinuans: quae pro suo

- quaeque capta et admittant, et habeant ad usum tuendae vitae. Ut sit quasi sol incorporeus quidam, nulli oriens, aut occidens, sed semper et ubique, et omnibus praesens.” カルターノによる太陽の光の比喩の理由については、Sakamoto, *Scaliger*, 37 を見よ<sup>46</sup>。
- (16) Scaliger, *Exercitationes*, 307.19, 403v: “Quamobrem quod tu ex Alexandri libris in tuos De anima centones transulisti, valde abhorret a philosophia. Ut intellectus materialis sit praeparatio quaedam in anima: quae praeparatio sit apta recipere species omnes intelligibiles. Etenim si est praeparatio, est accidens.” トム・ハンズ・ローズの翻譯『*プラトニズムの歴史*』(Edkhard Kessler, “Alexander of Aphrodisias and His Doctrine of the Soul: 1400 Years of Lasting Significance,” *Early Science and Medicine* 16 (2011): 1-93 を見よ<sup>46</sup>。
- (17) Scaliger, *Exercitationes*, 251, 324v: “Nullo enim modo differt a Platoniciis Ideis. Quarum singulae, unum essent quiddam, individuis omnibus communicabile. Huius parens primus, quod quidem extet, fuit Themistius (sed et Alexander idem quoque sensisse visus est). Avenrois vero nutrit.”
- (18) Scaliger, *Exercitationes*, 307.14, 398v: “Hunc Themistius, atque ante eum Plotinus, cum solis hominibus delegasset, tu ex Anaxagorae somniis, ut opinor, aliis quoque distribuere ausus es: ita ut etiam canis, etiam cicadae, etiam lapidi assistat: sed inutilis, ob ineptitudinem materiae. Illum igitur, quantum in se est, illustrare omnia: at non omnia illustrari. [...] Atque hasce naenias audes asseveranter praedicare quasi ex Aristotelis sententia? Quod si ita esset: quo post ille modo Platonicas Ideas impugnare? Nihil enim aliud, quod obicitur, habet, quam quod Idea unum singulare est, idemque separatum. Quocirca non potest idem esse extra singularia, et in singularibus, separabile, et coniunctum. Hoc enim idem pateretur ille cum suo intellectu, et uno, et communicabili, et separabili.”
- (19) アリストテレス『*靈魂論*』第一巻第二章 404b3-5、中畑訳、二六頁。『*ソクラテス以前哲学者断片集*』ヘルマン・ディールス、ヴァルター・クラント編、内山勝利他訳、第三分冊、第五九章「アナクサゴラス」(△)一〇〇番(岩波書店、一九九七年)、二七一頁。
- (20) Scaliger, *Exercitationes*, 307.18, 402v: “Quippe alii diffusam, ac quasi seipsam aspergentem intelligentiam esse, dixerunt. Alii animam mundi: quae tanquam apparitionis officio fungatur. Avenrois in Paraphrasi Metaphysices, esse ultimum motorum caelestium. Nonnulli etiam deum ipsum esse, volvere: temere admodum.”
- (21) スカリゲルの世界靈魂論批判については、Sakamoto, *Scaliger*, 32-52 を見よ。カルターノの熱の理論については、ピロ・ヒライ「ルネサンスの星辰医学：占星術の変容から普遍医薬の探求」『*学習院女子大学紀要*』第一六巻、二〇一四年、二三—四二頁を見よ。
- (22) Scaliger, *Exercitationes*, 307.20, 405r: “Quin istis edico simul: Omnem formam cuiuscunque perfecti misti, etiamsi non est anima, ut in

- adamante, naturam esse quintam, longe aliam a quator elementis. Quo ex loco deducitur herculeum argumentum adversus Alexandrum, qui animam quatuor ex elementis constituebat. Est in animae potestibus, quod nunquam fuit in potestibus elementis cutisquam.” ㉞
- 簡所のより詳細な分析として、坂本「アリストテレスを教へ」二六六―二七一頁を見よ。
- (23) 形相の神性について、Sakanoto, *Scaliger*, 135-136, 174 を見よ。
- (24) *Scaliger, Exercitationes*, 307.18, 402r-v.
- (25) *Scaliger, Exercitationes*, 307.15, 399v: “Decet enim animam propter suam dignitatem fungi suis officiis: suasque exercere potestates, absque ullius accidentis, aut inhaerentis, vel praesidio, vel adminiculo: sed sine ullo medio statim per essentiam suam. Quae essentia sine reali potestatum distinctione, est principium sibiipsi av̄tao&cc: id est quod sit satis sibi, ad producendas effectiones suas: easque non solum simplices, ac uniformes, sed etiam compositas, sed etiam diversas, sed etiam oppositas, propter suam simplicitatem, atque divinitatem: ia tamen, ut seriatim una post aliam, educantur.” 靈魂の神性と自律性について、詳しべし。Sakanoto, *Scaliger*, 119-120, 133-134, 137-138 を見よ。
- (26) *Jacob Schegk, De plastica seminis facultate libri tres* (Strasbourg: Bernard Jobin, 1580), sig. G7r-H1r.
- (27) *Robert Boyle, Origine of Formes and Qualities*, in *The Works of Robert Boyle*, ed. Michael Hunter & Edward B. Davis (London: Pickering and Chatto, 1999-2000), 5:351.
- (28) そのため彼の哲学は折衷的なものよらぬ。Guido Giglioli, “Girolamo [Geronimo] Cardano,” in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*: <http://plato.stanford.edu/entries/cardano/>
- (29) アヴェロエスをより広い観点からとらえる必要性は、アダム・タカハシ、ヒロ・ヒライ『危険な物質主義の系譜：アレクサンドロス・アヴェロエス、アルベルトゥス』(Kindle版、二〇一五年)が指摘している。

